370　頭頸部悪性腫瘍における^{99m}Tc-MIBIおよび^{201}Tl-chloride SPECT像の病変描出能の比較検討

鈴木健之、宮前達也（埼玉医大放）、横田一郎、飯沼壽孝（埼玉医大耳鼻科）、目澤良憲（丸山記念病院）

^{99m}Tc-MIBI（以下MIBI）は^{201}Tl-chloride（以下Tl）類似の腫瘍集積態度が見込まれ、テクネシウム製剤としての撮像上の優位性を加味し、腫瘍製剤としても期待されている。　我々は頭頸部悪性腫瘍31名（腺癌11、扁平上皮癌13、悪性リンパ腫4、その他2）32病変を対象に、MIBIおよびTlのSPECT像（15分像、3時間像）における病変描出能を比較検討した。検討項目は、早期像における集積度（視覚的評価およびT/N ratio）およびRetention indexとし、組織型および腫瘍サイズとの相関を検討した。視覚的集積度では、組織型に関わらずMIBIよりTlが良好であった。頭頸部悪性腫瘍において、病変描出能に限定すると、MIBIよりTlが良好であった。

371　頭蓋底腫瘍浸潤の２核種同時 SPECT 診断法：治療後頭蓋底への適応とその評価

福本光孝.黒原篤志.吉田大輔.吉田祥二（高知医大放）

われわれは頭蓋底を侵す腫瘍性病変の核医学診断を報告し実際の臨床評価に使用してきた。99mTc-HMDPと201Tlの同時収拾SPECT法でCrosstalkはTEWで排除してある。今回、本法で治療後の評価を行い、その有用性と限界を検討した。検討された治療後の症例は２５例で術後を８例含む。残存、再発の有無については感度,特異度とも 90%超の成績を示すが、組織型により信頼性の低下する傾向が有った。とくにlymphomaについては他のmodalityの画像に比較して信頼性が乏しい。治療後に限らず、治療された病変周囲に見られる肉芽や閉塞性sinusitisによる骨の変化を腫瘍特異性の高い201Tlで検討することで骨変化の原因が腫瘍性か否かを鑑別可能で、治療後判定にも有用だった。

374　^{123}I-MIBG　SPECT像による正常副腎の描出の検討

大日方研（国立西埼玉　放）鈴木健之　宮前達也（埼玉医大　放）　木下信一郎（木下循環器クリニック）

我々は前回の本学会にて^{123}I-MIBG　planer像における正常副腎描出率について報告している。今回はSPECT像における正常副腎描出率および集積度と尿中カテコラミン値との相関を検討した。対象はボランティア13名、高血圧患者14名、褐色細胞腫例2名である。^{123}I-MIBG(222MBq)静注２４時間にてSPECT像を撮影した。３名の核医学診断医の視覚的評価による正常副腎描出率は98.2%であった。また、副腎描画面を加算したSPECT像（加算SPECT像）における副腎/BG比と尿中アドレナリン値との間に正の相関があることが示唆された。

375　^{131}I-adosterol副腎SPECTを用いた機能性副腎腺腫診断の有用性

河中正裕、末廣美津子、中江龍仁、立花敬三、福地　稔（兵庫医大核）

^{131}I-adosterol副腎SPECTtransaxial像を重ね合わせたイメージに於て、左右各副腎とBG、また左右副腎の集積カウント比を算出することにより、機能性副腎腺腫の診断を試みた。

健常成人13名の右/左副腎カウント比平均0.990±0.16に対し、原発性アルドステロン症７例の腫瘍/対側比は2.26±0.45(p<0.01)、Cushing症候群５例では20.0±25(p<0.01)と、いずれも有意の高値を示した。またBGとのカウント比も、アルドステロン症1.80±0.31、Cushing症候群2.79±0.26と、対照群と比較して、有意に高値を示した。

副腎SPECTカウント比特に左右比の算出値は、対照群の重なりが少なく、画像処理が簡便で診断に有用である。

376　^{131}I-アドステロールシンチグラフィが有用であったSubclinical Cushing症候群の3例

日野　恵、伊藤秀臣、山口晴司、大塚博幸、檀　芳之、才木康彦、尾藤早苗、太田圭子、増井裕利子、池窪勝治（神戸市立中央市民病院核医学科）小林宏正、石原隆、森寺邦三郎、倉八博之（同内分泌内科）

Subclinical Cushing症候群の3例を経験した、女性2例（37、38歳）、男性例（66歳）であり、3例とも画像診断にて径2～5cmの副腎腫瘍を認めた。Cushing症候群を思わせる身体所見はなく、血液検査にてACTH 0～10 pg/mlと低下、cortisol 7.9～11.9 μg/dlと正常、Dexamethasone抑制試験では抑制は不十分であり、^{131}I-アドステロールシンチグラフィにて健側副腎の抑制がみられた。摘出標本の病理組織にて全例で3βHSD、p450c17の発現が顕著であり、隣接する正常副腎の萎縮が認められた。以上より本症の診断には^{131}I-アドステロールシンチグラフィおよびDexamethasone抑制試験が有用であると考えられた。

377　Neuroendocrine tumorにおける^{123}I-MIBGシンチグラフィの有用性

井隼孝司（鳥取赤十字放）、森岡伸夫(松江赤十字放)、神波雅之（鳥取大放）

^{123}I-MIBGシンチグラフィを褐色細胞腫、神経芽細胞腫を除く7例のNeuroendocrine tumorに行い、その有用性を検討した。組織学的診断が得られたNeuroendocrine tumor 7例(気管カルチノイド2例、小腸カルチノイド2例、直腸カルチノイド1例、後腹膜paraganglioma 1例、Glomus tumor 1例）を対象とした。MIBGシンチグラフィは^{123}I-MIBG 111MBq静注3～4時間後および24時間後のplanar imageを撮像し、必要に応じSPECTを追加した。気管カルチノイドの1例を除く6例において病巣に一致する集積を認めた。カルチノイドでは血中セロトニンと集積には明らかな関係は認めなかった。消化管カルチノイドの診断には24時間後像が有用であり、頭蓋底病変、肝転移巣の診断にはSPECTが有用であった。

Presented by Medical*Online